

新潟県中越地震により水没した木籠集落の復興

Process of Recovering of the Kogomo Flooded by the Mid Niigata Prefecture Earthquake in 2004

松井 治二
MATSUI Haruji

1. 2004年新潟県中越地震発生

10月23日、5時56分。何が起きたのか？ものすごい揺れと轟音が私達を襲いました。牛舎でいつもの様に牛達に餌を与えている時に地震にあいました。家に帰る事も出来ず、動く事も出来ずに3時間あまりが経ちました。この間も、余震が続いていました。揺れるたびに、山が崩れ、いつ私達を襲ってきてもおかしくないような状況でした。道は寸断され、何とか家に戻ろうと、崩れた土砂の上、倒れた木々、大きな段差が出来た橋。なんとか乗り越えて家に着きました。

村の中は、家が倒壊したり、土砂に押し流されたり、とてもひどい状況でありました。村の人達の安否を確認したところ、けがをした人はいましたが、命を落とす人はなく、みんなの声を確認できた事が、せめてもの救いだと思いました。その夜は、季節も10月後半と寒くはありましたが、とてもよく晴れた日で、月明かりが暗闇をうっすらと照らしていました。まだまだ、余震が続き、揺れるたびに山がうなるような音が響きわたりました。怖い思いでしたが、車の中で、夜を過ごし、ラジオをつけて情報を得ました。山古志だけでなく、どこの地域でも、大変な被害がでており、本当に最悪な状況になっているんだと改めて感じました。そして、長岡や小千谷や、川口など他の地域の情報はラジオで流れていましたが、山古志の被害の情報だけが伝えられる事はありませんでした。電話がつかない、車はもちろん、歩いて出られるような道も閉ざされているなか、村内の情報が気になって不安で仕方ありませんでした。

2. 一夜明けて、村が沈む事実立ちすくむ

夜が明け、明るくなって村の中を確認しましたが、本当に想像を絶するような悲惨な状況でした。以前の穏やかな村がどこへ行ったのかと、変わり果てた景色を目の当たりにして、声になりませんでした。そして、さらに追い打ちをかけるような事実が飛び込んできました。村の下流では山が動き、川をせきとめていると言う状況でした。時間がたてば、川の水がたまり、村が沈んでしまうと、とても想像もつかない、恐ろしい事がこれから起こるのかとみんなが茫然と立ちすくんでいました。

長岡へ勤めに出ている娘は帰ってくる事は出来ず、もちろん電話もつながらず、とても心配でした。堀之内に住んでいる甥っ子は、無事でいれば、必ず来てくれると考えていました。9時頃、思ったとおりに、私達の事を心配して、崩れた山を下って、昔の山道を小さいころはたんぼの手伝いなどをして知っていた事もあって、その道を使って、私達を見に来てくれました。自分たちの家も壊れたが、家族は無事だと聞いて安心しました。

こんな時だけど、平常心にならなければと、強く思いました。いつもの様に、牛や鯉に餌をやろうと思いました。3か所ある、牛舎にいつもなら車で10分程で着くところ、1時

間がかりでたどり着きました。牛舎は見るも無残な状態でした。牛舎は1階部分が潰されていました。その下に昨日まで、元気に餌を食べていた牛達がもがき苦しんで、鳴いている声を聞きました。張り裂けるような思いでしたが、成す術はなく、悔しい思いを押し殺し、その場を後にしました。

3. 決意

その昼過ぎに自衛隊の救助のヘリが助けにきました。村の人達はロープでつるされ、ヘリに乗り込みました。持っていく荷物は一つだけと制限されました。着のみ着たままで長岡市の学校の体育館に村の人70人が避難させてもらいました。私は時間いっぱいまで、自分のやっておくべき仕事を片付け、一番最後にヘリに乗り長岡の避難所へ行きました。

25日には、また自宅へもどり、間もなく村が沈んでしまうまでにと、村の人達の車を少しでも高いところへ移動させました。いつもの牛の餌くれもして、3日間過ごしました。その中でこんな大変な状態だけれども、何とか牛達を助けてあげなければと考えました。村も、時間があるかぎり、できる事はしてあげようと思いました。これから大変な試練が待ち受けている。私のなかでは、「なんとかして今迄の生活を取り戻したい。みんなを助けてあげなければ」と進むべき方向が決まっていました。

4. みんなが生き生きと生活していける場所作り

去年やった事が今年の為に、昨日やった事は今日の為に。村の人口は3分の1になってしまいましたが、やらなければと思った事を真剣に取り組む事で、やればできると感じました。地域づくりはそれぞれの地域の特徴を活かして、みんなが生き生きと生活していける場所作りを目指していければ良いと思います。

雪の中の賽の神（写真-1）に始まり、道普請、田植え、お盆（写真-2）、稲刈りなど、昔からの伝統はとても重要であり、残して行かなければいけないものと感じます。またそういった行事を後世に伝えて行く事で、来て頂いた人達への感謝、そして共に楽しい時間を過ごして、人と人との絆が深まっていくのではと感じました。

地震からの10年、もがき苦しみ、多くの人からの支えがあって、今の山古志があると思います。たくさんの人と触れあう中で、地域のコミュニティーづくりをしてきました。今までの経験を活かせるよう、これからは来てもらうだけではなく、自分達も他の地域に出向いて、私達の想いを伝えていきたいと思っています。



写真-1 賽の神(2014.1.12)
Sainokami



写真-2 祭礼の後、盆踊りを行う(2013.8.15)
After the shrine ritual Bon Festival dance was held.